

Research Plan for a Comparative Study of Indigenous Cultures along the North Pacific Rim from a Perspective of Alaska and Northwest Coast Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009574

北米アラスカ・北西海岸地域研究から見た
環北太平洋沿岸諸先住民族文化の比較研究の展望

岸上 伸啓

人間文化研究機構・国立民族学博物館

**Research Plan for a Comparative Study of Indigenous Cultures
along the North Pacific Rim
from a Perspective of Alaska and Northwest Coast Research**

Nobuhiro KISHIGAMI

National Institutes for the Humanities and National Museum of Ethnology, Japan

Reprinted from

The Proceedings of the 34th International Abashiri Symposium (2020)

(ISSN 2188-7012)

第34回北方民族文化シンポジウム網走 報告 (2020) 別刷

北米アラスカ・北西海岸地域研究から見た 環北太平洋沿岸諸先住民族文化の比較研究の展望

岸上 伸啓

人間文化研究機構・国立民族学博物館

Research Plan for a Comparative Study of Indigenous Cultures along the North Pacific Rim from a Perspective of Alaska and Northwest Coast Research

Nobuhiro KISHIGAMI

National Institutes for the Humanities and National Museum of Ethnology, Japan

It is known that Indigenous cultures along the North Pacific Rim are similar in many respects. European and North American scholars have attempted to explore the periods and routes of human migration from Asia to North America, as well as historical relationships among the cultures of the two continents. To accomplish this, the Jesup North Pacific Expedition Project led by F. Boas at the end of the 19th and beginning of the 20th centuries, the Crossroads of Continents Project organized by W. Fitzhugh in the 1980s, and the Jesup II Project initiated by I. Krupnik were carried out in the USA. On the other hand, while the international Abashiri Symposium of Northern Peoples was begun by the Hokkaido Museum of Northern Peoples in the mid-1980s, Hitoshi Watanabe's North Pacific Cultural Zone Study and Osahito Miyaoka's Comparative Research Project of Indigenous languages in the North Pacific Rim Regions in the 1980's to 1990's, and the National Museum of Ethnology's Special Exhibition project "Sea Otters and Glass Beads" in 2001 were conducted in Japan. This paper proposes a transdisciplinary comparative research project with a framework focusing on (1) historical change, current status, and future of Indigenous cultures and (2) cultural and social elements of Indigenous peoples along the North Pacific Rim from a perspective of Alaska and Northwest Coast research, after reviewing the above-mentioned major research projects.

キーワード：先住民族文化、環北太平洋、比較、超学際的、研究計画

Keywords: Indigenous Cultures, North Pacific Rim, Comparison, Transdisciplinary, Research Plan

1. はじめに

新旧両大陸の北太平洋沿岸地域における先住民族文化の間に類似性や共通性が見られることは、100年以上前から知られていた。この類似性や共通性を解明するために、フランツ・ボアズ (Franz Boas) によるジェサップ北太平洋調査プロジェクト (1897年～1902年) 以降、大小さまざまな比較研究が試みられてきた。

ここで取り上げる環北太平洋沿岸地域とは、ほぼ北緯30度以北の太平洋を挟んだ新旧両大陸の沿岸地域をさす。同地域は日本列島北部、サハリン島、アムール川流域、千島列島、カムチャツカ半島、チュコト半島、アリューシャン列島、北アメリカ大陸アラスカ沿岸、同大陸北西海岸地域を含む広大な地理的領域である。同領域は、シロザケの分布地域にほぼ相当する。

本稿では、これまでの研究成果を踏まえて、北アメリカ北西海岸先住民族文化の特徴を指標としつつ、環北太平洋地域の先住民族文化の比較研究を行なうという超広

域的な比較研究の構想を紹介する。なお、筆者の問題意識は、北太平洋の東西沿岸に分布する先住民族の間にみられる文化的類似性をどのように考えるべきか、彼らの文化がどのように変化してきたか、そしてそれらは今後どのように変化していくか、である。

なお、「民族」と「文化」を次のように便宜的に定義し、使用していることをお断りしておきたい。「民族」とは、特定の言語や生活様式を共有し、同じ集団に属しているという帰属意識をもつ人々の集団のことをさす。そして「文化」とは、特定の間人集団、特に各民族の(言語を含む)生活様式 (a way of life) のことである。これらの概念には、グローバル化や文化の混交状態を考慮すると、問題があるが、議論の出発点として用いることにしたい。

2. 環北太平洋地域の先住民族文化研究プロジェクトのおもな変遷

環北太平洋地域の先住民族文化研究プロジェクトのお

もな変遷について紹介する（岸上編 2015）。

2.1 フランツ・ボアズのジェサップ北太平洋プロジェクト

F. ボアズは、1897年から1902年にかけてアメリカ自然史博物館を拠点に環北太平洋地域の先住民文化に関する「ジェサップ北太平洋調査」プロジェクトを組織し、実施した。同プロジェクトの目的は、新旧両大陸の北太平洋沿岸の先住民間の歴史的関係の解明であった。その成果として、W. ボゴラスのチュクチ民族誌やW. ヨヘルソンのコリヤーク民族誌や資料集が刊行された。

このプロジェクトによって同地域の先住民文化に関する基礎的データが収集され、文化間比較も試みられたが、類似性とともな多様性が見られたため、結論の一般化には至らなかった（Boas 2001）。

2.2 北海道立北方民族博物館の北方民族文化シンポジウムと渡辺仁の研究

1991年2月の北海道立北方民族博物館の開館に先立ち、1986年から北方民族文化の国際シンポジウムが開催された。その第1回シンポジウムでは、ミルトン・フリーマン（Milton Freeman）と渡辺仁が基調講演を行った。フリーマンは、環北太平洋地域がひとつの生態的ユニット（システム）であることを指摘した。一方、渡辺は「北太平洋沿岸文化圏」の概念を提起し、同地域では複雑な狩猟採集社会が形成されてきた点を強調した。そして同文化圏の先住民文化の間に見られる共通の文化要素を比較検討し、適応（環境要因）と歴史的関係（伝播要因）によってその類似性と共通性を説明しようと試みた（渡辺 1988, 1992）。

2019年で34回の開催を数える北方民族文化シンポジウム網走では、環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する報告が多数行われ、同地域に関する文化人類学的、考古学的、言語学的研究の発展に大きく貢献してきたと高く評価することができる。

2.3 スミソニアン協会米国立自然史博物館の「大陸の交差点」プロジェクト

1980年代に入り、海を隔てた米国でも環北太平洋地域への関心が高まった。1980年代後半のペレストロイカ期にスミソニアン協会米国立自然史博物館・極北研究センターのウィリアム・フィッツヒュー（William Fitzhugh）がリーダーとなり、19世紀の環北太平洋地域の先住民文化（特に物質文化）に焦点をあてた国際研究プロジェクトと展示会を企画し、1988年に展示会「大陸の交差点（Crossroads of Continents）：シベリアとアラスカの諸文化」を開催した。また、同展示会の図録（1988）と国際シンポジウムの成果として『環北太平洋の人類学』（1994）を刊行した。このプロジェクトは、米口の研究者の交流および同地域の本格的な研究の再開を意味し、重要な学術的ターニングポイントとなった。

2.4 宮岡伯人の言語プロジェクト

日本ではユピック語を専門とする言語学者である宮岡伯人が、1990年ごろから環北太平洋地域の先住民言語に関する研究プロジェクトを開始した。1990年にはキックオフシンポジウムとして北海道大学において「北の言語：類型と歴史」を開催し、1992年には同名の書籍を編集し、出版した（宮岡編 1992）。

宮岡は1990年代半ばから2005年ごろにかけて大学院生や若手研究者を環北太平洋沿岸各地に派遣し、体系的な言語調査プロジェクトを実施した。その結果、多くの若手北方言語研究者が育つとともに、彼らによって北方諸言語に関する基礎的データが蓄積された。その一方で、それらの言語に関する比較研究による一般化はあまり進んでいない。

2.5 ジェサップ北太平洋プロジェクトII

スミソニアン協会米国立自然史博物館・極北研究センターのイーゴリ・クルプニク（Igor Krupnik）は、1992年にカナダ国ケベック市で開催された第1回極北社会科学国際会議（International Congress of Arctic Social Sciences）においてジェサップ北太平洋プロジェクトに関するシンポジウムを開催し、「ジェサップII」プロジェクトを提案した。その後、1993年にワシントンDCで、1994年にニューヨークで国際シンポジウムが開催され、それらの成果が出版された。2000年には札幌で谷本一之と井上絃一が国際シンポジウム「ワタリガラスのアーチ」を開催し、その成果を刊行している（谷本・井上編 2009）。

ジェサップIIは、ジェサップ調査の成果を再検証することと1900年頃以降の社会・文化変化に関する研究に焦点を置いていた。ペリョスキによる神話・昔話のモチーフの広大な比較研究などを例外とすれば、環北太平洋沿岸地域の諸文化の類似性と共通性の解明や社会・文化変化に関する一般化は行われなかった。

2.6 国立民族学博物館の研究・展示プロジェクト

1974年に大学共同利用機関として創設された国立民族学博物館では、環北太平洋沿岸地域の先住民文化についてアイヌ文化をはじめとしてさまざまな研究プロジェクトや国際シンポジウム、書籍の刊行が行われてきた。

2000年代に入ってから、大塚和義を実行委員長、佐々木史郎と岸上伸啓を実行委員として、北太平洋の先住民の交易に焦点をあてた2001年度特別展「ラッコとガラス玉」を実施するとともに、国際シンポジウムを開催した。このプロジェクトの特徴は、アイヌ社会と和人社会の交易およびアイヌ社会と北方先住民社会の交易を中心にすえ、それを環北太平洋沿岸地域における先住民間交易と欧米人・漢人との毛皮交易の中に位置づけたことであった。また、先住民が携わった交易活動が富を生み出し、彼らの儀礼活動や工芸品制作を活性化させた点を強調する展示を行った。

2.7 新大陸への人類の移動に関する考古学研究と生物人類学、言語研究の新展開

考古学や生物人類学分野では、人類の新大陸への拡散について新たな見解が提起された。旧大陸からアラスカに到来した人びとは、約1万3,000年前にコルディエラ氷床とローレンタイド氷床の間のマッケンジー回廊を南下し、南北アメリカの各地に拡散し、1万2,000～1万年前頃に南米の南端に到達したとする北アメリカ内陸ルート説が定説に近い位置を最近まで占めていた。しかし、1万3,000年前以前と考えられる遺跡や遺物が北アメリカ南東部や南アメリカのブラジルで発見され、移動年代の見直しを迫られてきた。近年では、これまで無氷回廊(内陸)ルートよりも北アメリカ北西海岸に沿って南下したというルートが有力視する考古学者もいる。また、内陸ルートと海岸ルートの2つのルートが併用された可能性も指摘されている。

アラスカ大学のベン・ポッター (Ben Potter) は、考古学と遺伝学、古代生態学の成果を総合して、人間の旧大陸から新大陸への移動の全体像を提示している。アメリカ先住民の祖先と考えられる遺伝集団は、南シベリア・モンゴル・北部中国あたりで約2万4,000年前に出現し、1万5,300年ぐらい前に急速に拡散した。そして1万6,000年前から1万4,000年前までの氷河後退期に新大陸へ広がったと考えられる。アラスカに到達した人間は、その後、大きく3つのグループに大別できるという。南アメリカ先住民の祖先は、1万5,300年から1万4,300年前までの間に無氷回廊を通して南下し、クロビス文化やそれに関連した古代インディアン文化として南北アメリカに広がっていった。その後、北アメリカ先住民の祖先が北西海岸に沿ってピュージェット湾あたりまで南下し、そこに留まり続けた。古代ベーリンジア人は約6,000年前に北アメリカ先住民の祖先に取って代わられるか、吸収されるまで、内陸アラスカに留まっていた。なお、旧大陸から新大陸への人間の移動は気候変動がおもな動因であったと考えられている。

現在、ポッターらがアラスカ内陸部において発掘を積極的に進めているので、新大陸への人類の移動と拡散については新たな成果が期待できる。ただし、北アメリカ北西海岸地域の海中に没していると考えられる考古学遺跡は調査されておらず、今後、新たな説が提起される可能性もある。

言語学分野では、中央シベリアのエニセイ語族ケット語とアサバスカン語族ナ・デネ語、トリンギット語、エヤク語との間に歴史的なつながりがあることが指摘されている。さらに同言語の分布とY染色体のハプログループQの分布が重なっており、ケットとアメリカ先民族の数集団との間の遺伝学的な近縁性が指摘されている。

2.8 研究成果の整理と提案

これまでの研究の蓄積によって、環北太平洋沿岸地域

における先住民族文化間に見られる類似性と共通性が出現した要因として、①生態環境が似ていることや②サケやアザラシなどの水産資源に生活の基盤を置いてきたこと、③歴史的に交易など相互交流があったことなどが指摘されている。また、人類の新大陸への移動については、考古学や古代生態学、遺伝学の成果が総合されるようになった。これまでの研究に基づき、環北太平洋沿岸地域における先住民族文化の現状を比較研究し、現状から同地域の過去と将来を考える国際共同研究を提案したい。

3. 環北太平洋地域の先住民族文化の共通性の比較研究の枠組み

3.1 これまでの比較研究

環北太平洋地域の先住民族文化に関する既存の研究の中で、もっとも広範で体系的な比較研究は、渡辺仁 (1988, 1992) による試みである。同氏は、環北太平洋沿岸地域の先住民族文化の類似と差異を説明するために、複数の文化要素を4つのカテゴリーに分類し、環境適応と歴史的伝播という2つの視点から比較検討した。

第1のカテゴリーは住生活に関連する文化要素群で、渡辺仁は定住性や線形集落がこの地域にはあまねく存在していることなど、6つの文化要素に関して分析した。第2のカテゴリーは食生活に関連する文化要素群で、サケ漁や漁具と漁法など9つの文化要素の共通性に関して分析を行った(渡辺 1988)。その後、彼は第3と第4のカテゴリーの文化要素を分析した(渡辺 1992)。第3のカテゴリーは社会生活に関連する文化要素群で、サケ儀礼や社会の階層化など6つの文化要素であり、第4のカテゴリーは戦争に関連する文化要素群で、戦争や鎧など5つの文化要素である(表1参照)。

表1. 環北太平洋沿岸地域に見られる文化要素の4カテゴリー群

カテゴリー群	文化要素
1 住生活関連要素群	1) 定住性, 2) 線形集落, 3) 堅穴住居, 4) 棟持柱, 5) 家の空間構造, 6) 木器の発達
2 食生活関連要素群	1) 鮭鱒漁, 2) 漁具と漁法, 3) 海舟, 4) 魚食性, 5) 干魚, 6) 魚卵食, 7) 貝食, 8) ウニ食, 9) 海藻食
3 社会生活関連要素群	1) 文身, 2) 笠, 3) 鮭儀礼, 4) 禊, 5) 特殊化狩猟, 6) 階層化社会
4 戦争関連要素群	1) 戦争, 2) 鎧, 3) 首級, 4) 仇討ち, 5) 防御施設

渡辺の研究方法は特定の文化要素の地理的分布を比較するという、きわめて機械的な文化要素の比較のように見えるが、共通要素を一般的(構造的)類似要素と特殊(個別的)類似要素の2種類に分けることによって、適応的で並行的な発展と伝播という2つの文化要素生成のメ

カニズムを考慮に入れている（渡辺 1992: 70-71）。渡辺によると、一般的類似要素とは大枠や構造における類似であって、定住性や階層性などを指し、共通の環境条件や社会・経済的条件などへの適応の結果、生み出された共通要素である。一方、特殊類似要素とは、細部の類似を示す双頭回転式銚先やサケ儀礼などであり、起源を同じくし、伝播や人の移動によって地域の共通要素として分布するようになった可能性が高いものである。渡辺は前者の要素として定住性、住宅と倉庫、魚干し棚の3要素から構成される家の空間構造、漁具や漁法、魚介食、貝食、海草食、社会的階層化に関係する諸文化要素を指摘している（渡辺 1992: 71-91）。一方、後者としては双頭回転式銚先や流し網漁、サケ儀礼複合体、木製食器類、丸太梯子式高床倉庫、笠、鎧をあげている（渡辺 1992: 95-107）。

渡辺の研究の問題点を指摘するとすれば、歴史的な時間軸の枠組みがあいまいである点、そして過去の「伝統的文化」に着目したがゆえに、現代の先住民族文化を比較の対象としなかった点である。また、渡辺は物質文化に焦点を合わせる傾向があり、家族・親族や宗教・世界観については十分に比較していない。筆者は、渡辺の視座を批判的に継承し、歴史性を重視しつつ、現在と未来を比較するための枠組みを提案したい。

3.2 比較の枠組みの提案

枠組みの骨子は、歴史区分と文化要素群からなる。以下、全体像を説明する。

3.2.1 比較のための歴史的枠組み

現存する先住民族の歴史は、大きく(1)自立期、(2)接触期、(3)植民地期、(4)国家による同化期、(5)政治的自律化期、(6)未来の6つの時期に分けることができる。先住民族によって実年代や体験の細部は異なるが、ほぼ同じような歴史的過程を経て、現在に至っている。

自立期は、各地の先住民族がヨーロッパ人や漢人、和ら人と遭遇する以前を指す。南北アメリカの先住民族は、ロシア人を含むヨーロッパ人との接触の結果、毛皮交易などに参与したり、伝染病によって人口が激減したり、大きな変化を体験した。

接触後、ヨーロッパ人が無主と見なした土地に入植し、人口が増大すると宗主国から独立し新たな国家を樹立していった。この過程で各地の先住民族は土地を追われたり、周辺地に隔離されたり、同化を強要されたりし、最終的には国家の中の政治経済的少数派になった。しかし、1970年ごろから世界各地で先住民族の政治的自律化運動が盛んになり、一部地域の先住民族の間では自治権が認められ、国家によって補償金も支払われた。国連や多くの国家は、各地の先住民族の政治的自律化などを徐々に認め、促進しつつあるといえるだろう。また、近年、温暖化などの環境問題と経済のグローバル化が、世界各地

の先住民族に多大な影響を及ぼしつつある。

この200年の間に世界各地の先住民族は大きな変化を体験してきた。本研究では、6時代区分を利用することを提案する。そして各地域や民族に関する調査については、現状の把握を出発点とし、過去を振り返り、未来を展望するという立場をとる。なお、未来については、各先住民族の人が現状を踏まえてどのような未来社会を構想しているか、望んでいるかが研究の中心となる。

3.2.2 比較のための指標項目

各先住民族の文化全体を有機的統合体と考えて相互に比較するのではなく、各文化を構成している文化要素や社会制度（以下、文化要素として言及する）を比較の単位とする。その理由は、これまでの研究によって各文化は閉じたシステムではなく、ゆるやかに開かれたシステムであり、位相や部位によって変化の速度や様相が異なっていることが判明したからである。

注目する文化要素は、(1)基礎的文化要素と(2)現代社会が直面している諸側面の2つの文化要素群からなる。これまでの比較研究において、(2)は体系的に取り上げられることがなかった。さらに、未来を対象とした研究もほとんど行われていない。筆者は、現在から過去を振り返り、未来を見るという視点に立って比較調査を行なうことを提案する。

3.2.2.1 基礎的文化要素群

基礎的な文化要素群は、人間が生きていく上で不可欠な衣食住と生業などに関連する。具体的には、衣類、料理と食慣習、住居（の構造）、生業（狩猟・漁労・採集・農耕・牧畜）、家族・親族、言語、宗教などである。なお、生業については、現代社会が直面している諸問題に関連する文化要素のひとつのカテゴリーとして取り扱う。

3.2.2.2 現代の先住民族が直面している諸問題に関連している文化要素

筆者は、現在のアラスカ・北西海岸地域の先住民族が特に直面している問題は大きく7つの課題に分類できると考える。それらは、(1)政治的自律化、(2)経済的自立、(3)食料確保のための活動、(4)社会・健康問題、(5)文化やアイデンティティの継承、(6)環境問題、(7)その他である。

(1)政治的自律化

先住民族の存在の認知と生活状況は、国家との関係、国際社会との関係、国内外の他の先住民族との関係によってかなりの程度、規定される。従って、日本、旧ソ連を含むロシア、米国、カナダ、英国という各国の先住民族に対する諸政策やランド・クレーム、先住民族の自治権獲得問題、国連や国際的NGO・NPOとの関係、国内外の他の先住民族との協力・対立関係の現状と歴史的变化を環北太平洋沿岸地域の諸民族間で比較検討することができる。

(2) 経済的自立

先住民族にとって経済的自立は重要な課題のひとつである。かつては生業活動と先住民族間交易によって生計を立てることができたが、欧米社会もしくは漢人社会、和人社会との接触後は、各地で行われた毛皮交易や森林・鉱物・水産などの資源開発への参加が先住民族の多くにとって重要な収入源となり、現在ではグローバル化経済のもとで賃金労働に従事している。外部社会との経済関係が変化の中で環北太平洋地域の先住民族の経済活動がどのように変化してきたかを比較検討することができる。

(3) 食料確保のための活動

世界各地の先住民族にとって狩猟や漁労、採集、農耕、牧畜などは、食料を確保する主要な活動手段であった。環北太平洋地域の先住民族の生業活動の現状を把握するとともに、どのように変化してきたかを比較検討することができる。

(4) 社会・健康問題

世界各地の現在の先住民族の生存にとって、社会・健康問題は大きな脅威である。すでに北アメリカ大陸では、ヨーロッパから到来した交易者や探検家、宣教師らとの接触によってそれまで存在していなかった百日咳やはしか、インフルエンザのような感染症が先住民族社会に持ち込まれ、人口が激減し、社会の再編成や文化の喪失が起こったことが知られている。その後、アルコール類が交易品として持ち込まれ、先住民族社会内に争いなどの深刻な問題を引き起こした。さらに近年では、欧米型の新たな食生活の浸透や麻薬問題の発生、HIVなどの新たな病気の拡大などが見られる。環北太平洋地域の先住民族の感染症による人口減少現象とその影響、アルコールや麻薬の影響、衛生・健康状態について比較検討することができる。

(5) 文化やアイデンティティの継承

世界各地の先住民族は、植民地化や国家による同化政策の実施、経済のグローバル化、気候変動の諸影響によって、伝統的文化やアイデンティティの継承が困難になりつつある。現在の先住民にとって彼らのアイデンティティと深く結びついている伝統文化の継承は喫緊の課題である。

先住民族のアイデンティティに深くかかわる文化要素に独自の世界観（自然や動物との関係）、靈魂観、儀礼、工芸・美術、音楽などがある。煎本孝は、ユーラシア大陸の北方から北アメリカ大陸にかけて「初原的同一性」、「超自然的互酬性」、「共生と循環の思想」という共通性が認められると指摘している。この考え方は、南米地域の先住民族文化の研究の進展によって南アメリカ大陸にも存在していることが判明している。特に生き物と人間の関係に関連して、靈魂のレベルでは人間と他の動物は同じであり、人間と動物は相互に変身できるという考え方が存在している。さらに、ワタリガラスやシャチをモチーフとした多数の類似した神話や昔話が環北太平

洋沿岸地域全域に分布している。このほかサケの初漁儀礼なども環北太平洋沿岸地域の各地で見られる。音楽に関連して、谷本一之は環北太平洋沿岸地域を「一面太鼓領域」と主張している。その上で、チュコト半島東端を境に西側が「内側把手領域」、東側が「外側把手領域」という差異を指摘している。

各地の工芸品や音楽、踊りは、先住民アートに変貌し、貴重な収入源になっている。経済がグローバル化するに従い、伝統的な工芸品や音楽などの商品化が起こる一方で、それらは先住民族が独自のアイデンティティを保持するための象徴的な手段として機能している。

環北太平洋地域の先住民族の世界観や靈魂観、儀礼、工芸・美術、音楽、踊りの変化について比較検討することができる。

(6) 環境問題

地球規模的な環境問題として温暖化が進展している。環北太平洋沿岸地域でも温暖化の影響が顕著である。例えば、北アメリカ北西海岸地域では水温の上昇に伴い、サケの分布域が北上し、従来の漁場ではサケがとれないという状況が発生している。すなわち温暖化は水温や海水分布への影響を通して、動物の分布や回遊パターンに変化を生み出している。これ以外にもマイクロプラスチックや水銀汚染など環境汚染の発生も想定できる。環北太平洋地域における温暖化や環境汚染の先住民族への諸影響や先住民族側の対応などについて比較検討することができる。

(7) その他

その他として伝統文化や言語の保持や現代社会への適応において果たす社会化や文化化、学校教育の役割に関する比較研究も重要である。また、環北太平洋沿岸地域は、火山地帯でもある。同地域における火山噴火や地震、津波、洪水などに起因する災害と復興についても比較検討することができる。

以上の提案を整理したのが、表2である。

表2. 比較のための時代区分と文化要素関連カテゴリーの概略

共通の歴史区分（軸）

(1) 自律期、(2) 接触期、(3) 植民地期、(4) 国家による同化期、(5) 政治的自律化期、(6) 未来

比較のための文化要素関連カテゴリー

(1) 基礎的なカテゴリー

①衣、②食、③住、④生業、⑤家族・親族、⑥言語、⑦宗教

(2) 現代の先住民族が直面している諸問題に関連している文化要素関連カテゴリー

①政治的自律化、②経済的自立、③食料確保（生業）、④社会・健康問題、⑤文化やアイデンティティの継承と創造、⑥環境問題、⑦その他（教育、自然災害など）

4. 今後の課題

本研究プロジェクトは、環北太平洋地域の各先住民族文化の歴史性を踏まえつつ、現状と未来について比較することによって、総合化と一般化を試みる超広域・超学際的地域研究である。このプロジェクトを実施するためには、克服すべきいくつかの問題が残されている。

4.1 学際的研究から超学際的研究へ

本プロジェクトでは、環北太平洋沿岸地域の先住民族文化の過去、現状、未来を多面的に比較検討し、成果の総合化を図る。このため、文化人類学や言語学、考古学、歴史学、地理学、生物人類学、政治学、経済学、法学、生態学、環境科学、水産学などの諸学の援用が必要である。従って、多様な研究者が相互に協働しながら参画する学際的研究である。本プロジェクトとこれまでの研究との大きな違いは、現地の先住民族コミュニティの人びとや多様な利害関係者の研究プロジェクトへの参画を前提とし、多様な先住民族の人びとと協働する超学際的研究 (trans-disciplinary studies) を推進する点である。このようなプロジェクトを実施するための協働体制を構築する必要がある。

4.2 文化人類学分野などにおける若手人材育成の必要性

言語学分野を例外とすれば、環北太平洋沿岸地域を研究対象とする研究者の層は厚くない。例えば、アラスカや北アメリカ北西海岸地域の先住民族を研究する若手・中堅の日本人研究者は複数いるが、カムチャツカ半島やチュコト半島の先住民族を文化人類学的に研究する若手研究者は皆無に近い。日本において同研究分野の若手研究者の育成が必要である。

4.3 国際連携ネットワークの構築

環北太平洋沿岸地域には、現在、日本、ロシア、米国、カナダという4カ国のいずれかに属する先住民族が住んでいる。また、さまざまな国の専門分野を異にする研究者がそれらの先住民族文化を研究している。従って、本プロジェクトを企画し、実施するためには、多分野の研究者や多様な先住民族コミュニティと連携し、共同研究・調査や情報交換のためのネットワークを構築する必要がある。

4.4 研究資金の確保と研究組織

調査・研究費を調達するためには、国内外の関係する複数の学協会、大学・研究所・博物館の研究者、先住民コミュニティが緊密に連携をとりながら、協議し、申請を行っていくことが必要である。また、研究プロジェクトの組織形態としては、全体の事務局は1カ所に置きつつ、調査・研究の実施や資金管理に関しては複数拠点からなるネットワーク型体制が効率的であると考えられる。

5. まとめ

本稿では、北米アラスカ・北西海岸地域研究の成果を比較の参照指標とする、環北太平洋沿岸地域の先住民族文化の比較を目的とした、超学際的ネットワーク型国際共同研究プロジェクト構想の全体像を概略的に紹介した。具体的な調査方法論や連携の仕組みの詳細は、今後の検討課題としたい。

北アメリカ北西海岸地域の先住民族であるハイダヤクワクワカワクウらは、サケ漁やポトラッチ儀礼、トーテムポールなど多くの文化要素を共有しているものの、異なる言語集団である。筆者は、北太平洋沿岸地域の先住民族文化の類似と差異を解明する上で、北米アラスカ・北西海岸地域に住む先住民族の文化と社会、言語の解明は重要な役割を果たすと考えるので、同地域の先住民族文化の研究から得た成果の検討をこの比較研究プロジェクトの出発点としたい。

記

本研究は令和元年度科学研費補助金「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」(JP19H00565) の研究成果の一部である。

主要参考文献

Boas, Franz

2001 The Results of the Jesup Expedition: Opening Address at the 16th International Congress of the Americanists, Vienna 1908. In Igor Krupnik and William W. Fitzhugh (eds.), *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1807-1902*. pp.17-24. Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution: Washington, DC.

岸上伸啓編

2015『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告132号) 国立民族学博物館: 吹田

谷本一之・井上紘一編

2009『「渡鴉のアーチ」(1903-2002) ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告82号) 国立民族学博物館: 吹田

宮岡伯人編

1992『北の言語: 類型と歴史』三省堂: 東京

渡辺仁

1988「北太平洋沿岸文化圏一狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』13(2):297-356

1992「北太平洋沿岸文化圏一狩猟採集民文化の共通性とそ
の解釈問題」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』
pp.67-107. 三省堂: 東京